

餅の意義 折口信夫全集より

正月に餅を搗くといふことも、実生活に深い関係を持つてゐるやうに見えるが、それは偶然餅が食物であるためのことで、正月の食物として餅を考へ出した訳ではない。更に餅には、人間の魂の象徴と言つた信仰があつた。それを親方・本家と言つた家にもつて行くことは、即、長上に対して服従を誓ひ、その健康を祈る意味において魂を奉る、宮廷の旧儀が、次第に民間に下つて、盛んになつたものである。今日では、単に正月の準備として餅をつき、正月の神の、家の中心として餅をもつた三方をすゑるといふ風に考へられてゐる。斯様に正月と餅との関係が深くなるにつれて、正月の行事の終りに、鏡開きといつて餅を食ふ儀式すらも生じて来た訳である。だから、餅を魂の象徴としなかつた地方では、正月に餅を用ゐなかつた村々さへ多かつた訳だ。

処が、いつか世間一般に正月前に餅をつき、正月には必、鏡餅をすゑるといふ風習が行き渡ることになつた近代では、僅かに諸国に残つてゐる餅を搗かない正月をする村が、非常に人の好奇心を引くやうになつた。その上、さうした餅の文明から残された極僅かの村々は、これこそ自分の村に伝つた旧儀といふ考へを一層深めて、ますます頑固に、餅なし正月を守るやうになつたのである。その他おせち・雑煮・門松・しめ縄等、いづれも起原があつて行はれることだ。

年中行事は、次第にその意義を忘れられながらも尚、その行事の中にひそむ一種の古代の約束に対する篤実な行為が、長くこれを伝へさせて来たのである。

入会案内

飯野八幡宮八十八膳献穀会 会員募集

奉耕会員 二十五名
賛助会員 五十三名
特別会員 八名

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献饌神事は古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献饌神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足させ、神饌田を設けて、田には糯米を作り、畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

この御奉仕を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と、風土に根ざした農業文化を、新しい世代が理解してさらに受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私共の活動をご理解頂き、多くの皆様がご入会くださるようお願い致します。

結 yui No.4

発行日 平成十三年九月二十五日
発行所 八十八膳献穀会
〒九七〇 八〇二六
福島県いわき市平八幡小路八十四
飯野八幡宮社務所内
〇二四六 二一 二四四四
発行責任者 飯野 光世
写真提供 かかし ぐらしの伝承郷
八十八膳献饌行事 岡田亨三

結 yui

八十八膳献穀会 会報 第肆号

みのりのいろ 竹岡 智恵子

実りの田は夕暮れどきを明るくし、夕闇の中でもほのかな彩りをみせる。秋の実りの色である。天候に左右され手間のかかる稲の育ちを見守つた者に、この実りの色は満ち足りた気持ちを与えてくれる。

水口祭りで豊作を祈願した田植えの後、田の草取り・畔草刈り・水引き・虫送りと生産の無事を乞う祈りや慎みの心で汗を流し、過酷な労働を懸命にこなして秋を迎える。

稲の穂がこごむころ、節分から数えて二百十日月曆では九月一日にあたるは荒れ日といわれ、稲の生育に予測される災害や不安の防除を祈る神事を行っていた。赤飯を炊き神に供え農作業を休んで無事を願つた。かざりや風まつりの祈禱をし豊作を祈り、悪魔払いに神楽を舞つて家々を回つたところもある。生活のすべてが稲作にかかつていたから二百十日が荒れ日とならずに済めば収穫が見込めるので人々は安堵して、刈りあげや秋祭りに神へ感謝の供えをする。

実りの田に立てられた一本足の案山子は収穫の秋を迎えた農村の風景である。案山子は鳥獣の被害から作物を守るために立てられるものであった。



現在、いわきで見られる鳥獣除けの方法は、衣服を着て帽子を被つた人形、表裏色違いのビニールテープを張つたもの、黒いビニールの切片を吊り下げたもの、田一面にネットを被せたもの、爆音をたてるものなどである。さらに、悪臭のする物を畔に置く方法や物音をたてたり鳥獣の屍を吊り下げたりする方法もあった。なかにはまったく何もしなかつた田もある。

小学唱歌「案山子」の一節「山田の中の本足のかかし……天気のよいのに蓑笠つけて……」という姿をした案山子は、いわきでは全く見られなくなった。私たちは、カカシ・カガシという言葉に「へのへのもへじ」と書かれた顔の滑稽な案山子だけを思い浮かべてしまふ。案山子は、頭と胴を藁で作る古い笠を被せ古い蓑を着せた姿に大きな意味があつた。現在の生活に藁・笠・蓑を使用しなくなったことが案山子の姿を変えてまつたのである。

日本各地にあつた次のような伝承から案山子の実像がわかる。秋上げを終えた十月十日に蓑笠を着た案山子を田から運び庭先きに立て餅を供えて祀る。それをカカシアゲといった。また、十月十日の夜はトウカンヤ（十日夜）といい、案山子の神が天に上る日なので、庭に白を出し農具などに蓑笠を着せて案山子を作り餅を搗いて供える。それをカカシガミサマという。このように案山子は秋の実りをもたらし田を守る神であると明確にとらえられていたのである。

農政の変動による青刈りや減反の休耕田は、秋の季節には見るに忍びない風景であるが、大地から恵まれる実りによって生かされていくことを忘れず、感謝する心だけは持ち続けていきたいものである。

ミケツもの

飯野八幡宮の年間の祭典には、毎朝夕行われている「朝神饌祭、夕神饌祭」、一日、十五日の行う「月次祭」、年に一度の「例祭」、その他一月一日の「歳旦祭」、一月三日の「元始祭」、二月三日の「節分祭」、二月十一日の「紀元祭」、旧暦二月の初の卯の日の「初卯祭」、十二月二十三日の「天長祭」、また、大祭式でおこなわれる「祈年祭」、「新嘗祭」など多くの祭典がありますが、いづれの祭典でも神饌をお供えし、祝詞を奏上し、玉串を奉る、という基本は同じです。

神饌とは、神様にお供えする飲食の総称を「神饌（しんせん）」古くは「ミケ」と言いました。神社の祭において、神様に神饌を奉りもてなすということとは、神と人が共に食事をする中心となる大切な行事です。

飯野八幡宮では九月十五日に八十八膳献饌行事がおこなわれています。この神饌が八十八膳にもおよぶもつとも丁寧なおもてなしといえるのではないのでしょうか。

この神饌は、明治期の国家神道時代に大きく変遷し「生饌」といわれる未調理のお供え物が主流となりましたが、多くの神社にはその神社独自の特殊神饌といわれる物が残っているようです。これについては、後日紹介したいと思います。

お供えした神饌は、祭典終了後お下げし、直会（なおひ）で頂きます。この神饌には御神気がこもっており、それを食することにより、神人合一の境地が生まれ、人同士は「同じ釜の飯を食べた」仲間という意識が生まれ、それが、命の継承を意味することとなります。

「まつり」「は」「まつろつ」、すなわち神の「みあれ」をじっと待つことであり、「みあれ」した神を丁寧におもてなしし、神威の高揚を願い、「ご神徳のお陰を頂く」という報恩感謝の思いを具現化したものがあります。「まことまじろ」を尽くし、今年の例祭も無事執り行うことができました。皆様のご奉仕に深く感謝申し上げます。

(飯野八幡宮 宮司 飯野光世)



八十八膳献饌次第

- 御高盛
- 御餅
- 御汁
- 御料理
- 御菓子
- 御盃
- 御高盛

